

【シンポジウム：「21世紀の近代化」を考える】

基調講演

「西洋の衝撃」への対応

—— 福沢諭吉と嘉納治五郎の二人の先達に見る日本の近代化とレガシー ——

望 月 敏 夫

目 次

はじめに—近代化論議のアプローチ

1. 西洋（欧州及び米国）式の近代化とは何か。
2. 西洋モデルの後発国への伝播と受容とは何か
—その成否と持続可能性のための「4条件」—
3. 「西洋の衝撃」に対する対応の各国比較
—上記1と2の一般概念と具体状況—
4. 福沢諭吉と嘉納治五郎に見る日本の近代化
5. 日本の近代化にまつわる二つの現代的課題（問題提起）

はじめに—近代化論議のアプローチ

従来より、所謂「近代化」をめぐる議論は、専門家の間でも一般市民の間でも多様で複雑で論争的であるので、それへのアプローチとしては、①歴史の内在的評価（当時の尺度で分析・評価）②イデオロギーの排除③学際的検討④国際的視野（国際関係論、世界史的視点）⑤現代的課題への意識（レガシー、歴史の教訓）が求められる。

また、近代化論は上記の通り拡散し易いのでこの講演の枠組みを整えるため、まず、①「近代化（西洋モデル）」及び②「西洋モデルの伝播と受容」について、史実から帰納法的に得られた定義をおさらいとして確認する（多くの先行研究の中から選んだスタンダードな定義）。

1. 西洋（欧州及び米国）式の近代化とは何か。

定義；産業化を軸に社会の四つの分野で五つの主体に起きた「全社会的」変動と価値変動。共通項は目的合理性の実現。

— 四つの分野とは；経済（産業化）、政治（民主化）、社会（個人の確立）、文化（合理的精神）

— 五つの主体とは；家族（家父長制から核家族）、村落（都市化）、組織（血縁・地縁から目的集団へ）社会階層（身分制から業績主義へ）、国家（分権から統一国家へ）

2. 西洋モデルの後発国への伝播と受容とは何か

— その成否と持続可能性のための「4条件」—

- (1) 後発国側の動機の強弱；外的動機（外圧への危機意識）と内的動機（現行体制への不満又は擁護）
- (2) 外国文化の受け入れ土壌（伝播の「初期条件」と呼ばれる）；①国家の統一、統治の正統性 ②国内経済・市場の発展度 ③文化・教育水準、識字率 ④外国文化に対する柔軟性・積極性
- (3) 伝統勢力（ancien régime）や宗教勢力の抵抗の強弱
- (4) 国際環境の有利・不利

3. 「西洋の衝撃」に対する対応の各国比較

— 上記1と2の一般概念と具体状況—

- (1) 非西洋後発国の日本；西洋文化の伝播の4条件が揃い西洋の衝撃をソフトランディング出来た。即ち①動機；アヘン戦争等のアジアの惨状を見た危機意識やナショナリズムを全国各層が共有。下級武士を軸に封建

身分制への反発が強く倒幕運動へ ②受容の初期条件；比較的容易に統一国家が成立，全国的な統一市場も形成，寺子屋等の教育と識字率，中国文化受容の歴史があり（“予習済み”）西洋文化摂取に柔軟・積極的③尊王攘夷や宗教勢力の抵抗を制御 ④西洋列強の主関心は中国。この結果，①政府主導の近代化（文明開化）②短期間，急速な近代化（お雇い外国人の医師ベルツは急激さを“死の跳躍”と危惧）③日本の伝統と西洋との調和等，を特色とする日本の近代化が成功した（世界史的に稀有）。

- (2) 非西洋後発国の中国（清朝以降）； 清朝末に日本の近代化を模した洋務運動（接ぎ木的な“中体西用”論）や变法派改革があったが，体制内改革であり国内統一や教育水準等の「初期条件」も不揃いで失敗した。清朝後の諸改革も内戦や列強の干渉で未達成。社会主義革命（これもマルクス・レーニン主義中心の西洋文化の受容）により近代化を急いだが，現在の「社会主義市場経済」や「中国式民主主義」が西洋モデルへの“接ぎ木”でなく真の近代化（人間解放）となるか？

- (3) 朝鮮；17世紀以来中国に朝貢し鎖国して来た李朝朝鮮は国力衰退と列強の開国圧力の中で近代化を試みるが，体制内改革（小中華的な儒教中心）であり（やはり接ぎ木的な“東道西器”論），日本に屈した。血縁・地縁等の儒教の影響は前近代的要素として現在も南北朝鮮の政治，社会，財閥に残り不安材料。北朝鮮は近代以前の中世的ですらある。

- (4) 西洋内後発国としてのドイツとロシア；ドイツは19世紀初まで35の領邦国家と封建農奴制の下にあり，ようやくビスマルクが国家統一と近代化を果たし，列強に加わった。諸制度が日本の手本になった。

ロシアは17世紀ロマノフ王朝以来西欧への追いつきが一貫した課題で種々の改革がなされたが，ツァリズムの権威主義が残り“未完の近代化”と呼ばれた。社会主義革命でも諸矛盾を解決出来ず，体制変革後に現政権は「モデルニザーチア」（近代化）に取り組み中だが，問題も多く引き続き「未完」である。

4. 福沢諭吉と嘉納治五郎に見る日本の近代化

日本の近代化に多くの先達が各立場から寄与したが、この二人を選択した理由はその業績が現代日本を考える今日の意味で重要だからである。特に、①教育と啓蒙活動の分野を先導し個人の自立や男女平等の民主主義を説き、産業、技術等のハード面の発展の基礎となる「心の近代化」を全国的に広げた②政府と一定の距離を置く「民の立場」から近代化諸策に貢献し、戦後日本の官民協調体制にも引き継がれた③西洋の先進性を取り入れつつ日本のアイデンティティの維持に努めた④弱肉強食の国際環境を直視した上で国際協調を訴えた（戦後の日本に最も欠けている点）。二人とも標語に長けており、福沢は「独立自尊の精神」、嘉納は「精力善用、自他共栄」の語で上記の諸点を訴えている。

日本の民主主義の父として福沢の功績は絶大だが、それを良く語るものとして、その著作「学問のすゝめ」が当時の日本の人口3千5百万のうち160人に1人が読んだとされ、その後の自由民権運動、大正デモクラシーを経て戦後民主主義の基礎となり、更に清末中国からの多数の留学生（嘉納はこのうち9千人世話をしたと言われる）を通じ中国にもたらされた。彼の「脱亜入欧」論はアジア侵略論との受け止めもあるが、彼の意図は早期近代化論であり最近の中国でもかかる評価が出ている。

柔道・体育・スポーツの父としての嘉納はスポーツの価値を学校教育の重要要素として人間形成に用いたが、メダル至上主義に陥りやすい今日のスポーツ界への警鐘である。日本のオリンピック初参加と1940年東京五輪招致を導き国民統合と日本の国際的地位の向上に寄与したことは2020年東京大会招致にも通じる。嘉納のレガシィがスポーツ関係を中心に語られて来たのは当然だが、上記の福沢との共通点のように日本の近代化というより広いコンテキストで更に評価されるべきであろう。

5. 日本の近代化にまつわる二つの現代的課題（問題提起）

①日本の近代化モデルが提起する正負のレガシー（例えば歴史認識問題，現行憲法の改正，集団的自衛権等の新安全保障法制）及び②日本の近代化の手本である「西洋モデル」自体の今日の世界での妥当性（例えばグローバル化，格差，環境問題）を検証し今後の政策に繋げることは，近代化論の重要課題である。